

センタージャーナル

■ 発行人 / 荒山 淳

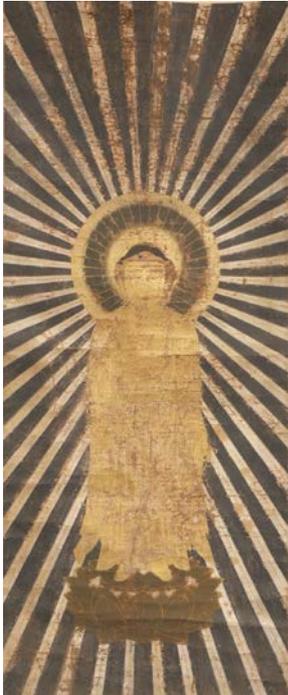
■ 発行所 / 真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 聖典研修 第7・8回 『仏説阿弥陀経』 — その教義と真宗の儀式 — **2・3**
 - ・ 研究生本廟奉仕団 わたしにとって真宗本廟とは？ ~なぜ、本廟奉仕をするのか~ **4・5**
 - ・ 尾張の中世真宗史料調査レポート(1) — 半田市・無量壽寺の法宝物について — **6・7**
 - ・ INFORMATION **8**
- ◆ イラストカット集 (※寺報などにご利用ください)



詳細は6、7面「尾張の中世真宗史料調査レポート(一)」をご覧ください。

(写真の無断転用はご遠慮ください。)



半田市・無量壽寺に伝わる親鸞聖人御影(写真左)と方便法身尊像(写真右)。中世真宗の貴重な法宝物である。

月愛三昧

清澄の秋夜、ふっと想い出すことがある。私の幼少の時、母が用意してくれた団子と薄を供え、ト兔 兎 何見て跳ねる月と「うさぎ」を歌いながら中秋の名月を愛でたこと。月では兎が餅をついて暮らしている物語に、私の中の時はゆったりと流れていた。それから半世紀。宇宙飛行も夢ではなくなりつつある。と同時に、月に跳ねる兎は私の心の中からすっかり姿を消してしまった。そんな私にいま、宗祖は御和讃で呼びかけて下さる。

無明長夜の燈炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障おもしとげかざれ

「正像末和讃」真宗聖典五〇三頁

無明の闇をつつみ長夜に浮かぶ満月の澄明なひかりは、地球上の生きとし生けるものこのころに久遠劫より降り注がれている。この「無明長夜の燈炬」の御左訓に宗祖は、

常の燈火を弥陀の本願にたとへ申すなり、
常の燈火を燈といふ、
大きななる燈を炬という

『親鸞和讃集』(岩波書店一六九頁)

と記される。

身の破滅のときが近づき迫っていても、闇の中では予感もなく得意満面に生きてい

る。価値ある宝物が傍にあったとしても、闇の中では躡くだけである。人知の眼は、この世を盲冥として生きるほどに昏いのである。

しかし悲しむことはない、闇はいよいよ深くして、光はますます冴えわたる時機が到来したのだ。無明長夜を照らす弥陀の本願という燈火があるかぎり、罪障重しと歎くことはない。無慙放逸を生きる凡小愚鈍の身のままにたすかる道がある。くりかえし誦する和讃の響きのなかに身をひたすとき、不思議にも生死苦海の只中に、如来大悲の願船に乗託されるのである。たすかりたいと憶う人より、もっと深く苦海の中に身を沈めて、その人を下から支えながら難度海を渡る大船のかたじけなさを思うのである。もし、その船上に在りながらも尚、「智眼くらしとかなし」み、「罪障おもしとげ」くことがあるなら、謙虚そうなことを言いながら、実は如来の願心を疑っているのである。

闇の深みに冴えわたる燈炬とは、真昼の輝く光ではない。闇夜を照らし出す光一月愛三昧。如来難信の私の内面の闇を照らし出し、人間として生きることの悲しみの中に遇法の歓喜を感じしめる。悲しみを消し去るのでない、悲しみが光ってくる、それが月の光に照らし出された歓喜なのである。

秋の夜長、私は再び月の兎に再会できるだろうか。(主幹 荒山 淳)

聖典研修

『仏説阿弥陀経』―その教義と真宗の儀式―

第七回 二〇一五年五月十五日（金）

自力の儀式と他力の儀式

講師 竹橋 太氏（儀式指導研究所研究員）



助業という課題

儀式とはどういうものなのかについて話をしたいと思います。つまり、儀式は「助業」なのかどうかということです。この「助業」ですが、善導大師の『観経疏』の「散善義」には、「五正行」というものが引かれています。そしてそれを引用して宗祖親鸞聖人は『愚禿鈔』において『聖典』四四五～四四六頁、一心に弥陀の名号を専念することが「正定之業」とされ、一方で、お経を読誦する、観察する、礼拝する、讃嘆供養などは「助業」だと言っておられます。

また、親鸞聖人がこの「助業」を引いておられることもあり、存覚上人は『破邪顕正鈔』において、親鸞聖人の『和讃』について、『和讃』を読むようなことは讃嘆に当たる、助業になるのだと言っておられます。（『真宗史料集成』巻一・七三八頁）

それから覚如上人は『口伝鈔』「助業をなおかたわらにします事」（『聖典』六六二～六六三頁）において、親鸞聖人が三部経の千部読誦をやめたことに注目し、親鸞聖人は助業に当たるものは傍らにおいて、主にされなかつたと言ってお

られます。三部経千部読誦は助業であるから、「今はさてあらん」という言葉でやめたということ。つまり先学達は儀式を、念仏に対して、読誦、讃嘆等の「助業」ということで考えてきたと言えると思います。

儀式は仏の説法

後の時代になり、覚如上人・蓮如上人の教学であると言われる「相伝教学」の文書『稟承餘艸』（一七八八年）が著されました。そこに「勤行声明之事」として次のように言われています。

真宗道場の勤行声明は、悉くも「普十方の為に微妙の法を説きたまふ」
 （『大経』巻上・『聖典』四三三頁）の仏の説法なり。「音声の中、最も第一と為す」「微妙和雅」（『大経』巻上・『聖典』三六頁）の法音なり。

これまでとは違い、勤行声明を仏の説法だと言っています。『稟承餘艸』という書物は相伝教学というものを紹介する形で、江戸時代に広まりました。実はこの『稟承餘艸』には、かなり現代的で自由な見解が述べられています。例えば、おかみそりを

門徒がいただくという儀式は江戸時代からありました。このことについて『稟承餘艸』は「一味等味の心身平等」、要するに在家も僧侶もみなまったく同じなのだから、得度もおかみそりも同じ意味を持つているのだとはつきり言っています。

当時の幕府がこのような見解を見たら問題としたいと思います。僧侶は僧侶、在家は在家という秩序を保たなければいけないということに配慮がなされていた時代です。幕府に対する自己規制という面もあったかもしれません。宗派内から、『稟承餘艸』への批判として、それを用いて教化していた僧の学寮による取り調べもありましたし、『稟承餘艸評破』という書物も出されました。おかみそりについて、『稟承餘艸評破』では、門徒が亡くなった時に行う儀式を先にやっているだけだという書き方をしています。

その、『稟承餘艸評破』が「勤行声明」について、こう言っています。

勤行声明を仏の説法とすること諸宗にも今家にも一向なきことなり。勤行声明は是仏前の行法なり。（中略）
 報謝の経営なり。仏の説法と心得たるは、増上慢の頂に居て報恩を念ぜざるの邪見と云ふべし。

みなさんどのように考えますか。ここであるように「私がしていることが仏の説法である」と言ってしまうと「増上慢」という批判は避けられません。しかしまた「私が報謝する」ということで、本当の報謝となるのでしょうか。仏前の行法ということであれば、我々がすることであり、それは自力の行となってしまう。

他力の儀式

しかし、真宗の救いは「南無阿弥陀仏」と称える我々の姿によって表現されています。我々を救おうとする法蔵菩薩が、南無阿弥陀仏という名号になったのです。つまり、南無阿弥陀仏と称える姿が、仏がいらっしゃる、存在することの表現であり、証明でもあるのです。

その証明が形となったものが儀式です。みんなで勤行している姿を他所から見ると「ああ、あそこに仏さまがいらつしやる」となるでしょう。儀式によって仏が現れている。「我々がする」ということで言えば助業になります。しかしそれが仏の自己表現になっているとも言えます。こういうことを還相回向というのだと思います。

もちろん『稟承餘艸評破』のように、報謝の気持ちで儀式を執行するという部分もあるかもしれません。ただ、儀式やお念仏というものには仏自身が現れている還相回向なのだ考えなければ他力になりません。そうでなければ儀式やお念仏をすることによって、つまりそれを因とすることによって何らかの結果を求めるといふ、自力の行法になってしまうのです。

私の思いを先立てれば、「自力の行」すなわち「助業」です。形のとおり行うことによって、南無阿弥陀仏を表現できるといふことでは「他力」すなわち「仏の説法」を表現していると思えます。形については、その形自体が適当かどうか、という吟味はしなければいけません。少なくとも形があることによつて我々は仏事、すなわち仏の事業としての儀式を行えるのです。またそうであるからこそ、私たちの意識とは別に、儀式そのものが「報謝」を表現しているといふことになってゆくのだと思います。

第八回 二〇一五年六月十八日(木)

祇樹給孤独園が意味するもの

講師 廣瀬 惺氏 (同朋大学特任教授)

祇樹給孤独園で説かれた経

多くの經典には、その經典が仏説であることを証している序分があります。「証信序」といわれるものです。この「証信序」で述べられる六つのこと(六成就)が整わないかぎり、仏陀といえども法を説くことはできません。

この六成就の中、經典の内容を決定するものとして、どこで説かれたかという「処成就」があります。『阿弥陀経』の場合、祇樹給孤独園において説かれたということが、特に重要な意味を持っているとただかれます。

祇樹給孤独園とは「祇樹と給孤独の園」です。「祇樹」とは、ギタ太子の林です。そして「孤」とは親のない子ども、「独」は一人住まいの老人を意味します。スダッタという長者は、そういった孤独な人々への救済活動をしていたので、給孤独長者と称されていました。そういった背景を持つ場所において、『阿弥陀経』は説かれたのです。

そうしますと、祇樹給孤独園とは、人間における「状況的な救済」と、それを超えた「宗教的な救済」とが切り結んでいる場所だと申し上げることができると



と思います。

宗教的な救済とは、状況を超えて開かれていく救いです。宗教的真実に生きる在り方ということです。切り結んでいるとは、緊張感を孕んだ対立関係を持っているということです。

「状況的な救済」と「宗教的な救済」

その中身をもう少し確かめていきたいと思えます。給孤独長者は、孤独な人々への救済活動をしてこられた。それがあ

る時、仏陀の説法を聞いて感動し、精舎を寄進した。これは、一つには状況的な救済(物質的な救済)だけでは満足できないものを人間が抱えていることを表しています。外から見れば、老人施設でも設備の整ったものが建てられてきています。しかし、それで問題が片づくかと言えは、そういうことではないのでしよう。以前、老人ホームに勤めていた友人から聞いたことですが、「なぜ生まれてきたか」「これまで、何をしてきたのか」など、そういう問いを抱えながら日々を過ごしている利用者さんがおられる。施設の中では、いろんな問題が渦巻いているということも教えてくれました。

そのような問題について、例えば、清澤満之先生で言えば、「人心の至奥より出づる至盛の要求の為に宗教あるなり」という言葉で表されています。

また、訓覇信雄先生が「人は単に楽がしたいわけではないんだ。苦勞しても悔いのないものに出遇いたいんだ」とおっしゃっていただいたことが思い出されます。そういう意味では、宗教に縁をいただいている私たちは、宗教的要求を掘り起こし、明確にしていくことが大事なことでしょ

現実から問われる信心

というのは、宗教の眞実を問い返して

くるものが、人間の状況的な苦しみだからです。祇樹給孤独園は、一方ではそのことを意味している場所でもあります。そういった状況的な救済と宗教的救済(宗教的眞実に生きる在り方)の両面性を表している場所ではないでしょうか。宗教の眞実を学び、それに生きようとする在り方を問い返してくる。そこに、「難信」をテーマとする『阿弥陀経』があるといつてよいのではないのでしょうか。「正宗分」の結びの部分(『聖典』一三三頁)には、衆生の側からすれば法(眞実)は「難信」だとあります。そして衆生の難信を克服させようとする仏陀の仕事が「難事」だと説かれています。状況的な課題の中で信に立つということは

容易なことではないということでしょう。ここが明瞭にならないと、眞宗が在家仏教とはなっていないのではないのでしょうか。

在家仏教とは、現実社会の課題のただ中で、宗教の眞実に依って生きる救いを明らかにしていこうとするものです。この一点の問題を課題として説かれておりますのが、『阿弥陀経』の「難信」であり「難事」ということです。

聖典を学ぶことの意味

先回ご質問いただいた中に「現代社会ではいろんな問題が起こっている。そういう中で聖典を学ぶことの意味は何か」という問題提起がございました。私自身は、時代社会の問題を背景にして聖典学習の場に臨んでいるつもりです。直接は申しておりませんが、そういう状況を抜きに眞宗を学ぶということは有り得ないのではないのでしょうか。様々な問題を抱える状況において宗教の眞実に依って生きるのか。あるいは宗教の眞実を放棄して生きるのか。これは現実の問題でありますから、一人一人において決着を付けていく以外にない問題です。

しかしそれは、一人一人において、状況的な救済と宗教的救済との切り結びの緊張感の中で、常に明らかにし続けなければならぬ問題であるということがあるのではないのでしょうか。

研究生本廟奉仕団
2015年6月2日~4日

わたしにとって真宗本廟とは？

なぜ、本廟奉仕をするのか？

六月二日から四日にかけて、教化センター研究生による真宗本廟奉仕を行った。
この本廟奉仕は、「わたしにとって真宗本廟とは？」のテーマのもと、三年の任期中に必ず行われているものであり、他教区の奉仕団、教導・補導、宗務役員など、多くの方々との出あいがある。

今回は、江戸期の度重なる本廟焼失に際し、懸命に消火活動や仏具の搬出などに尽力された被差別民衆との関わりについての特別講義を日程に組み込み、奉仕団終了後には、被差別部落に縁のある柳原銀行記念資料館などを中心としたフィールドワークを通して学びを深めた。

研究生が感じた「わたしにとって真宗本廟とは？」について掲載したい。

大事なことは 理解ではなく^{たいげ}体解すること

真宗本廟とは、願いの出発点であり、その願いが相となり、行となって現れたものだと感じた。

また日程中、教導の方の講義で、「真宗の学びは理解ではなく体解である」と学んだ。そして私の日々の生活は、ただ迷いの中を流転しているだけであると知った。



教導・補導との出会いも
奉仕団の楽しみのひとつ
相馬豊教導（金沢教区・右）
中川唯信補導（京都教区・左）

真宗本廟の「場の力」から問われる

た。この真宗本廟奉仕団は、傲慢な自分自身を省みるための大切な機縁となった。

第九期研究生 堂宮 淳賢 たみやま じゅんけん

奉仕団で一番感じたのは「場の力」である。全国各地から、北は北海道、南は九州まで、本当に様々な人たちがそれぞれの思いを抱えて真宗本廟に足を運び同朋会館で出会う。食事・風呂・勤行と、集団生活を共にする中で感じる「場」の雰囲気というか、空気感が、私には心地よかった。そして、自分が真宗本廟に来た姿勢が問われた気がする。

第九期研究生 田島 晶 たじま しょう



私たちの真宗本廟。これまでも、これからも

恩返しの本廟奉仕

「同朋会館でお話させてもらうのは、私にとっては恩返しなのです」そう語った教導の言葉が一番心に残った。真宗本廟での三日間は、普段の生活から考えれば「面倒くさい」ことばかりの日程だ。しかし、このような体験がなければ普段の生活を見直すこともなかったように思う。

言葉や理屈ではなく、生活を通して伝わるものがあるのだと感じた。そんな生活を私達に先立ち続けてこられ、それを私達に伝えてくれる先輩方からの恩を、自分の生活に返していく。大切な課題をいただいた。

第九期研究生 荒山 優 あらかやま ゆう

伝統から出あった私

清掃奉仕の時間が印象に残っている。一心不乱に雑巾がけをして、心が洗われるような気持ちになった。清掃後、教導の先生に「清掃奉仕は、これまでも必ず奉仕団の日程に組み込まれてきたんですよ」と声をかけていただいた。私の隣で黙々と床を拭いていた先生の姿に、本廟に奉仕してきた方々の伝統が現れていたように感じた。

真宗本廟は人との出あいの場であると同時に、その伝統から自分を見つめ直す、自分自身との出あいの場とも言えるのかもしれない。

第十期研究生 玉腰 暁広 たまし あきひろ



現地学習でお世話になった山内政夫さん（柳原銀行記念資料館 事務局長・左）と特別講義をいただいた雨森慶為さん（解放運動推進本部委員・右）



清掃奉仕も楽しみのひとつ

本廟奉仕は修学旅行みたいで楽しい

同朋会館での楽しみの一つは食事の時間。様々な地域の方たちと会話をしながら一緒に食事をいただく。それぞれの地元の話や今日の日程の話をするのは、とても楽しいひと時だ。

そして、一人一部屋ではなく、みんな川で寝る。近頃では中々ないことなので、とても新鮮だ。まるで大人の修学旅行のような感じがした。奉仕団に参加するまでは、あまりいい印象がなかったが、一日一日があつという間に過ぎ、充実した時間を過ごせた。

次回は是非、一般奉仕団として参加してみたい。

第十一期研究生 鍋野了悟なべの りょうご



諸殿（宮御殿）での座談会。
庭園を眺めながらの座談会は、とても開放的だ。

御堂にかけられた人々の想い

「次世代にお寺は残っているのか」。北海道の過疎の村から本廟奉仕に来られた門徒さんと、そんな話をした。

思えば、この真宗本廟も幾多の危機を経て今ここに相続されてきた。あらためて歴史の重み、先祖の思いが詰まっていることに気づかされる。そしてその願いは、自坊にもかけられている。

第十期研究生 菱川俊ひしかわ しゅん



被差別部落の歴史について学べる「柳原銀行記念資料館」

京都市下京区下之町6-3（入館無料）
JR京都駅から東へ徒歩約8分にある
詳しくは「柳原銀行記念資料館」で検索ください。

なぜ、本廟奉仕をするのか

私は、これまで自分からすすんで真宗本廟（京都）へお参りしたことがない。研修や講演だけを目的とし、本廟を訪れていたように思う。しかし、本廟奉仕に行くこと、お参りを目的に訪れた多くの方々とお出あう。恐らく先祖が大事にしてくれたことをそのまま受け止め、参拝に訪れるのだろう。そこには「なぜ？」という問いの存在しない、理屈ではないお参りの姿を見ることが出来る。

また、今回の本廟奉仕では、江戸期における両堂焼失に際し、いのちを省みず消火を試み、仏具を搬出した被差別部落の方々の方々の歴史について学んだ。日程終了後には、本廟から歩いて十分ほどの、その方々が住まわれていた地域も訪れた。「いのちをかけてまで燃えさかる両堂になぜ飛び込んだのか」という疑問を抱き、客観的にしか見ようとしない私は、ただ驚くことしかできない。

あらためて「なぜ本廟奉仕をするのか」だが、先人たちが大切にしてきたものに触れ、先人の生き様を習い、今を共に生きる人々の願い（思い）を感じることを通して、わたしにとって本当に大切なものとは何かを探す場なのだと感じた。

教化推進要員 飯田真宏

尾張の真宗史

尾張の中世真宗史料調査レポート(一)

—半田市・無量壽寺の法宝物について—

研究員・小島 智

かつて蓮如上人の五百回御遠忌を迎えるにあたり、名古屋教区教化センターでは蓮如上人研究班を結成し、名古屋教区を中心に各地の寺院・道場および門徒宅に伝わる中世真宗の法宝物を調査した。その調査結果は、一九九八年の「蓮如上人研究―北陸・岐阜編―」「名古屋教区教化センター研究報告(以下『研究報告』)第二集」と、二〇〇〇年の「蓮如上人と尾張」(蓮如上人と三河)の章も所収。「研究報告」第四集にまとめられた。そしてその成果に基づき、同年四月の名古屋別院蓮如上人五百回御遠忌法要期間中には、「蓮如上人展」が開催されたのであった。

明年、名古屋教区・名古屋別院が宗祖親鸞聖人の七百五十回御遠忌法要を勤めるにあたり、その法要期間中、「親鸞聖人と尾張門徒―その信仰のすがた―」展が同じように教務所講事堂を会場に開催される。この展示会は同朋大学文学部准教授・安藤弥氏の指導のもと、展示会スタッフ数名によって行われる。筆者はそのスタッフチーフとして日々準備に追われているところであるが、その過程で、従来知られていなかった尾張の地に伝わる中世真宗の法宝物が何点か確認された。とくに、半田市成岩本町の無量壽寺に所蔵されるものは今までほとんど実見されることなく、当然『研究報告』第四集でも取り上げられなかったのであるが、このたび大河内康御住職の御厚意により同朋大学仏教文化研究所との合同調査(二〇一五年六月五日、七月三〇日)が実現し、貴重な法宝物数点が確認された。そこで、それらを紹介させていただこうと思うが、今回は紙面の都合上、「親鸞聖人と尾張門徒」展に出陳予定のもののみとする。

①切箔九字名号(絹本着色) 縦二二・九・四cm×横三三・〇cm(上部賛縦一六・七cm)



初期真宗教団で依用された本尊は、各門流でそれぞれ独自の様式であったと言われるが、この無量壽寺に伝わる九字名

号も、初期真宗教団において本尊として依用された典型的な形態である。紺地絹本の中央に切箔で九字名号を記し、名号

と蓮台の周囲に光明を描く。すでに、『真宗重宝聚英 第一巻 名号本尊』(昭和六三年、同朋舎出版)の図版No.57に紹介されているが、長らく公にされることがなかった。今回の調査で改めて確認することができたのは幸いである。

以下、『真宗重宝聚英』を参考に若干の解説を試みたい。蓮台の彩色などが剥落しているものの、元来の姿をよく留められている。放たれる光明は六十六条、名号自体は切箔の籠文字である。上部に賛文があり、「和朝親鸞正信偈文云」として「正信偈」の「本願名号正定業」から「応信如

②蓮如上人筆六字名号(紙本墨書) 縦九・八・四cm×横三・七・三cm



初期真宗教団の各門流で独自の様式で依用された本尊も、周知のように本願寺教団においては、長祿元(一四五七)年の蓮如上人の留守職継職によって統一されていく。当初蓮如上人は紺地絹本に金泥で籠文字の十字名号と四十八条の光明を描き、さらに上下に賛文を添えた、いわゆる「無碍光本尊」を下付するが、寛正六(一四六五)年の延暦寺衆徒による大谷本願寺破却以後はこれを改め、以後は紙本に墨書の六字名号を数多く下付するようになる。これは延暦寺から「無碍光衆」と非難されたことによると考えられる。まず蓮如上人が書かれたのは楷書の六字名号であったと言われ、同じく楷書の

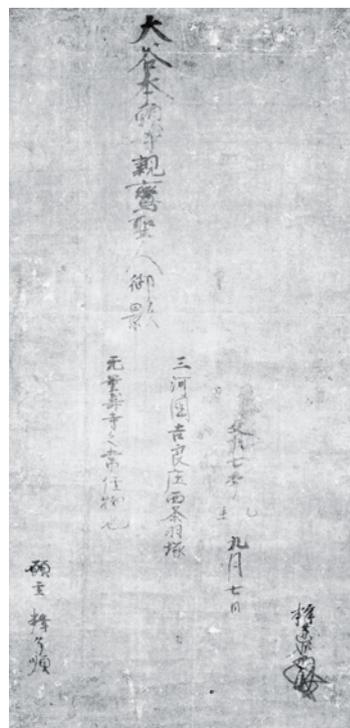
来如実言」までの八句が記されるが、『真宗重宝聚英』ではこの賛文は後に添えられたとする。このような切箔もしくは金泥籠文字で書かれた九字名号は、他でもその存在が確認されており、大半が親鸞聖人真筆として伝えられる。「羽塚山无量壽寺縁起(以下『縁起』)」*でも、無量壽寺開基了善が親鸞聖人より上に賛のある九字名号を賜ったことが述べられるが、残念ながら他の九字名号と同様、制作年代は南北朝末期か室町初期まで下がると推定される。*無量壽寺住職・大河内康氏編集発行の小冊子「真宗大谷派 羽塚山無量壽寺」を参照。

十字名号・九字名号も存在する。ただ、爆発的な教団拡大もあってか、次第に草書の六字名号が主流となっていく、蓮如上人筆の名号と言えば、一般には草書の六字名号がイメージされる。この無量壽寺蔵の六字名号も典型的な蓮如上人筆の草書六字名号であり、保存状態も極めて良好である。「縁起」によれば寛正五(一四六四)年に無量壽寺第八世了順は大谷本願寺を参詣し、翌年の本願寺破却には上宮寺の如光らとともに駆けつけたという。恐らくはこれ以前に了順は蓮如上人の門弟となり、応仁二(一四六八)年の上人三河下向の際にこの名号を受けたとも推測できるが確証はない。

③ 親鸞聖人御影 (絹本着色) 縦一〇四・八cm×横五〇・八cm

巻頭写真右参照

同 裏書 (紙本墨書) 縦六二・七cm×横二九・九cm



大谷本願寺親鸞聖人御影

文明七季^乙 九月七日

三河国吉良庄西条羽塚

无量壽寺之常住物也

願主 釋了順

釋蓮如(花押)

④ 方便法身尊像 (絹本着色) 縦九六・三cm×横三九・六cm

巻頭写真左参照

同 裏書 (紙本墨書) 縦五五・八cm×横二四・一cm



方便法身尊形

本願寺釋蓮如(花押)

乙 九月九日

成岩

願主釋了順

③ 親鸞聖人御影

この親鸞聖人御影は、『真宗史料集成』第二卷(昭和五八年、同朋舎出版)の「蓮如裏書集」にその記録があるが、今まで写真が公開されることはなく、実態は全くの不明であった。この度の調査ではじめてその存在が確認されたわけである。

裏書を見ると「蓮如裏書集」にあるように、蓮如上人より文明七年九月七日付で「三河国吉良庄西条羽塚无量壽寺」の了順に下付されており、親鸞聖人の「左上の御影」である。「左上の御影」とは聖人の念珠を持つ手のうち、左手が上になっている御影のことで、この時期に下付されたもののみに見られる特徴であると

いう。御影上部に賛が記されており、『入出二門偈頌』の「觀彼如来本願力」以下四句で、また左端に「和朝親鸞聖人」の像主銘をかすかに見て取ることができ、いずれも蓮如上人筆と思われる。

蓮如上人下付の親鸞聖人「左上の御影」は、単身像・連座像合わせても十数点しか確認されておらず、きわめて貴重である。なお尾張地域では、これに先んずる文明二年十二月十七日に、木曾川流域の河野門徒に下付されたと伝える「左上の御影」があり(岐阜県河野六坊組合蔵)、すでに『センタージャーナル』No.21で、井川芳治氏が「蓮如下付の親鸞・蓮如二尊連座像」と題する論考にて紹介済である。^{*2}

^{*2} 井川氏は旧蓮如上人研究班スタッフであ

り、この度の「親鸞聖人と尾張門徒」展のスタッフでもある。「左上の御影」については井川氏より御教示を受けた。謝意を表したい。

④ 方便法身尊像

蓮如上人が本願寺留守職継職後、紺地絹本の光明十字名号(無碍光本尊)を下付するようになったことは先に記したが、同時に絹本着色の方便法身尊像、つまり光明四十八条の阿弥陀仏絵像の本尊も裏書を施して下付している。ここに掲げたのも蓮如上人下付の方便法身尊像である。裏書に蓮如上人の署名と花押がはっきりと残っており、かすかに読み取れる「乙巳」の干支から文明十七年九月九日付とわかる。願主は了順であり、さらに「成

岩」の文字も読み取ることができ、なお、『真宗史料集成』第二卷「蓮如裏書集」に記録があるだけで、③の親鸞聖人御影と同様、写真が公開されるのは今回がはじめてである。

さて、「蓮如裏書集」を見ると宛所として、「尾張国知多郡成岩郷 羽塚山無量壽寺」と補われている。これがどのような記録によって補われたのかは定かでないが、「成岩」の文字はかすかながらも裏書本紙で判読できるので、文明十七年の段階で尾張国知多郡成岩に無量壽寺の何らかの坊舎が存在していたことは確かである。実は、無量壽寺にはもう一幅、三河国幡豆郡羽塚の地に宛てられた蓮如上人下付の方便法身尊像が存在する。これも従来「蓮如裏書集」にその記録が見えるだけであったが、今回の調査で表の阿弥陀仏絵像、裏書ともに確認された。紙幅の関係でその紹介は次回以降とするが、「蓮如裏書集」に「文明七^末年九月七日」と補われてある下付年月日については再検討を要する。詳述している余裕がないので結論のみ記すと、その下付年月日は文明十六年以降と考えられるのである。よって、この頃無量壽寺は三河国幡豆郡羽塚と尾張国知多郡成岩の地に二坊あり、三河国幡豆郡の方が本坊であったと推測することができる。そしてその後、戦国期の三河一向一揆の解体により、寺基が完全に尾張国知多郡成岩の坊舎へ移ったのであろう。

この二坊体制であったとの推測は、『縁起』に、無量壽寺開基了善が三河国矢作郷柳堂で親鸞聖人逗留時に弟子となり、三州羽塚郷にて聖人の教えを弘通していたところ、尾州一門の願いによって同州成岩郷に一字を建立し、三尾の両草堂において教化ますます盛んになったとあるのとも矛盾しない。

「2015 あいち・平和のための戦争展」に出展



「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないやうに」（日本国憲法前文）というテーマのもと、8月20日から23日かけて「2015 あいち・平和のための戦争展」が名古屋市公会堂を会場に開催され、今年も教化センターから出展した。

来場者は四日間で約1700人に達した。

真宗大谷派はかつて、教えを^{ゆが}め、積極的に国の動きに協力し、戦争に加担していったという、決して消し去ることのできない過去を背負っている。今回展示した「戦争布教」に関する書籍や、竹中彰元などの反戦を唱えた僧侶への宗派の処遇は、その一端である。戦後70年の節目を迎え、先の宗会において「非戦決議 2015」が議決された今だからこそ、過去の事実を見つめ、今を生きる私たち一人ひとりの姿勢を改めて問うことを主眼とした。

安全保障関連法案などに代表される「普通の国」を目指す動きと、日を追うごとに高まりを見せる世論の声。沈黙を貫くことを良しとせず、自ら考え、主張し、声を上げる道を選び始めた国民たち。この激動の時代に、私は一人の宗教者として何ができるのだろうか。そして、次の世代に何を残すことができるのだろうか。

展示の最後に掲げた「兵戈無用」（『仏説無量寿経』巻下）という教えの尊さと、それを実現しようとしないう私自身の愚かさを、改めて突き付けられた四日間であった。

（職員 寺西 賢静）

INFORMATION

教化センター日報
■2015年6月～2015年8月

- 6月1日 研究業務「平和展」学習会
- 2～4日 研究生・現地研修「真宗本廟奉仕研修」
- 12日 研究生・学習会「真宗本廟奉仕研修 事後学習」
- 16日 教化センター運営会議
- 17日 研究業務「平和展」学習会
- 18日 教化研修「2014年度 聖典研修⑧」（廣瀬惺氏）

- 26日 研究生・実習「真宗門徒講座（書いて味わう「正信偈」③）」
- 7月3日 研究生・実習「真宗門徒講座（書いて味わう「正信偈」④）」
- 14日 研究業務「平和展」学習会
- 28日 研究業務「平和展」学習会
- 30日 教化研修「2015年度 聖典研修①」（廣瀬惺氏）
- 8月5日 研究生「第9期生 修了式」
- 20～23日 「2015 あいち・平和のための戦争展」参加
- 26日 研究生「第12期生 面接」
- 28日 研究業務「平和展」学習会

第12期研究生が任命されました。よろしくお祈りします。



こづか じゅん
小塚 順
(第21組 西生寺)

これまで教壇を学んできましたが、今私の中では、そもそも僧侶とは如何なるもので、私は如何なる僧侶となるべきかについて関心を抱いています。これから3年間の学びの中で、様々な方々に出会い、様々な経験を通して、自身の事実の中に確かめていきたいです。



かとう ひろあき
加藤 博証
(第21組 徳本寺)

今後、多くの方々と出会い、私の課題をみつけないと思いません。精一杯取り組みます。



みずの たくま
水野 拓磨
(第28組 専慶寺)

皆様とともに一つ一つの仏縁をいただき、味わいながら楽しくやっていけたらと思います。今後、様々なところでお世話になります。よろしくお祈りします。



てらにし しゅうじ
寺西 修司
(第20組 堅誓寺)

これから研究生として精一杯取り組み、学びを深め、仲間と共に成長させて頂きたいと思っています。そして、積極的に新しい事や困難に「挑戦する」3年間にしたいです。

お知らせ

- 〈再任〉主 幹 荒山 淳
- 〈退職〉業務嘱託 玉野 正聡
- 〈新任〉業務嘱託 田島 晶
- 業務嘱託 服部 岩光

〈編集者雑感〉

“出会いと別れの季節”と聞いて思い浮かぶのは、いつだろうか。一般的には“春”や“4月”なのかもしれないが、今の私にとっては教化センターの人事が行われる“7月”や“9月”の方がしっくりくる。

今号でご報告したとおり、新たに第12期研究生として4名が任命された。彼らの新鮮な表情を見ると、私自身が研究生として過ごした日々を思い出す。研究生の三年間という時間は、長いようで短い。学問、座談、実習、文書伝道など、多種多様な視点から物事を学ぶ中で、最も心に残った（＝引掛かった）課題とは何か。私の場合は、それを探さずだけで精一杯の三年間だった。

さて、第12期生の4名は、どのような三年間を過ごすのだろうか。職員として、そして研究生OBとして、見守ってきたい。（て）

公開講座のご案内

◆聖典研修 『仏説阿彌陀経』—その教義と真宗の儀式—

- | | | | |
|-----|---|-----|--|
| 日 時 | 第3回 10月29日(木)①
第4回 11月13日(金)②
(全8回 第5回 2016年1/21、第6回
2/19、第7回3/17、第8回6/16)
各回とも午後6時～8時30分 | 講 師 | ① 廣瀬 惺氏 (同朋大学特任教授)
② 竹橋 太氏 (儀式指導研究所研究員) |
| 会 場 | 名古屋教務所1階 議事堂 | 持 物 | 『真宗聖典』 |
| 聴講料 | 500円
※教師陸補のための聴講証発行研修 | | |

■教化センター

- 〈開 館〉月～金曜日 10:00～21:00
- 土曜日 10:00～13:00
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)
- 〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間
～お気軽にご来館ください～

ナゴヤごえんきキャラクター

イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。

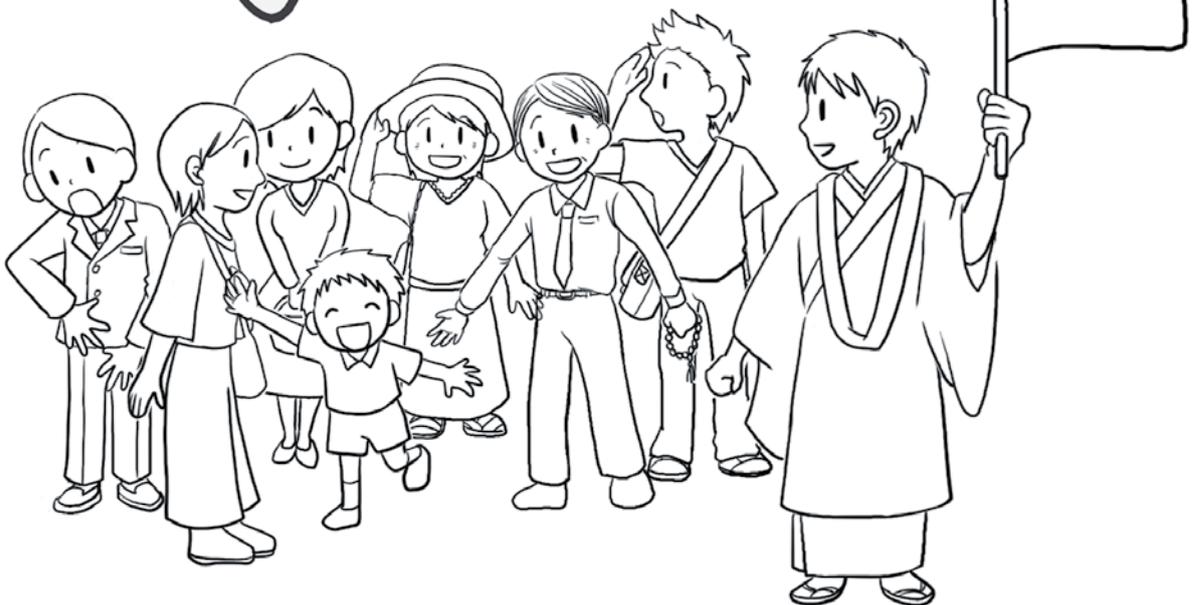
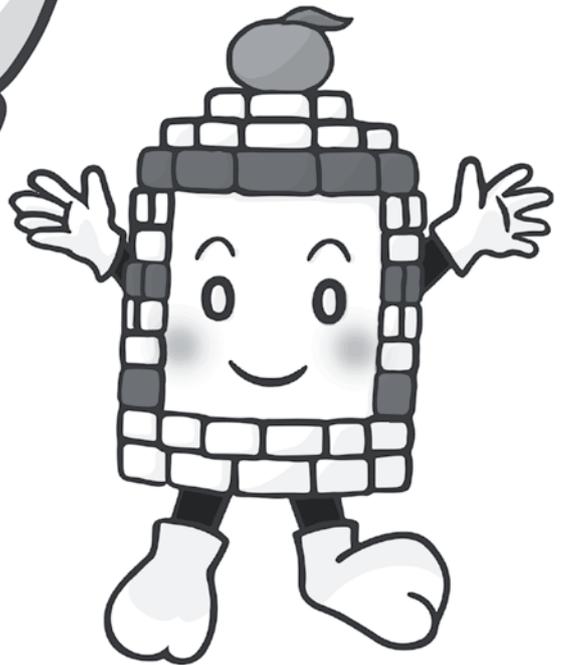
千鶴ちゃん



蓮ちゃん



オケヅツくん



- データを希望される場合はお問い合わせください。
- 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。